

就学前教育における異文化間教育の構想に関する一 考察：ドイツ・ビーレフェルト市の構想を事例とし て

伊藤，亜希子

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻：博士課程2年

<https://doi.org/10.15017/7374739>

出版情報：国際教育文化研究. 6, pp.69-80, 2006-06-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



就学前教育における異文化間教育の構想に関する一考察

ードイツ・ビーレフェルト市の構想を事例としてー

伊藤亜希子

1. はじめに

本稿では、ドイツの一地方都市であるビーレフェルト市で作成された「就学前段階における言語促進と異文化間教育への構想¹⁾」を事例に、就学前教育の領域でいかに異文化間教育が進められようとしているのかを明らかにする。この構想は、移民の子どもに対する早期ドイツ語教育と移民の子どもを取り巻くドイツ人の子どもに対する異文化間教育の双方に言及したものである。この構想から、市レベルの地方行政が地域の多文化化に直面し、それを如何に受け止め、どのような教育提供を目指そうとしているかが明らかになるであろう。

ドイツにおける異文化間教育は、外国人労働者とその家族の受け入れに端を発したものであり、当初は出身国から編入してくる外国人の子どもが存在する前期中等教育や初等教育が重視されていた。その後、外国人労働者とその家族の定住化の進行により、かれらが移民としてドイツで生活するようになった。そのため、移民の子どもの多くがドイツで出生し、保育所や学校に通うようになっていく。そのようなドイツ社会の実情から、早期からの移民の子どもに対する教育支援とともに、移民の子どもとドイツ人の子どもの共生のための両者を対象とした異文化間教育の重要性が高まっている。

このような実情を踏まえ、連邦政府や州政府レベルだけではなく、都市レベルにおいても、移民の子どもの早期ドイツ語教育を促進するための規定や移民の子どもとドイツ人の子どもの両者を対象とした異文化間教育に関する構想が作り出されるようになった。本稿で取り上げるビーレフェルト市においても、同様に言語教育と異文化間教育に関する構想が打ち立てられている。そこでは、移民の現状を踏まえ、就学前の移民の子どもやその親に対するケアやドイツ人の子どもをも含めた異文化間教育的対応が求められる領域において考慮すべき課題などが示されている。これは単に子どもだけでなく移民の親にも注目している。移民の親が注目されるのは、親の教育への理解を深めることで、子どもへの教育効果を高めると考えられているためである。しかし、ここでは単にそれだけを目的とするのではなく、子育てや保育所での活動を通して、移民の親は当然のことながら、ドイツ人の親をも含んだ親同士の交流を深めることをもねらいとしているためである。すなわち、これは、異文化間の共生が迫られる多文化社会の中で成長している子どもの教育に地域全体で如何に取り組んでいくべきかを示そうとしている。

ものである。

今日、日本においても就学前段階での異文化間教育は注目を集めているが²⁾、それは未だ「外国人幼児」にのみ注目している段階であり、外国人幼児と日本人幼児の両者を対象とした教育的取り組みに言及したものは僅かである。この点から見ても、本稿で取り上げるドイツにおける試みが就学前教育の在り方に何らかの示唆を与えるものになるだろう。

2. ビーレフェルト市による「就学前段階における言語促進と異文化間教育への構想」

ビーレフェルト市の就学前教育における異文化間教育への構想は、青少年・社会・住居に関する計画・財務課 (Amt für Planung und Finanzen, Jugend, Soziales, Wohnen) が 2003 年 11 月に提出したものである。本稿では、紙幅の都合上、構想の内容をすべて取り上げることができないため、①異文化間教育の概念規定、②親との協働、③言語促進（ドイツ語能力の促進）、④保育所、の 4 項目に焦点化し、内容を紹介すると共に、若干の考察を試みたい。

①異文化間教育の概念規定

市当局作成の構想では、異文化間教育の概念規定を行う前に、まず「異文化間 (interkulturell)」ということばについて触れられている。

「異文化間」ということばの概念は、文字通り、異なる出身国や文化から来ている人々や異なる生活様式を持った人々の間 (inter-) で生じる相互作用やコミュニケーションを意味している。この定義から、異文化間教育を行う際に一方の同化を問題とするのではなく、広い意味において、双方の、あるいは更に多くの人々の互いに同等な文化的交流が課題となることが明確である。

このように「異文化間」ということば、特に「間」ということばが、マジョリティであるドイツ人とマイノリティである文化的背景の異なる移民との間の相互作用を重視しているということを確認している。

次に、そのような相互作用が恒常的に生じる多文化社会の中で求められる基本的能力を挙げている。また、すべての子どもに対し提供される異文化間教育の意味と異文化間教育の中で必要不可欠とされている能力について述べられている。

異文化間教育は、偏見なく心を開くこと (Offenheit)、尊重 (Respekt)、寛容 (Toleranz)、結束 (Solidarität)、責任 (Verantwortung) という基本的能力を促進し、発展させるものである。異文化間教育とは、一方では、すべての子どもにできる限り早くから、他者がそれぞれの社会化や文化的背景に基づいた態度をとったり、振る舞うのだと捉え、それを評価し、理解することを伝えるものである。また、他方では、自身の行動様式を社会文化的観点から考察することで、異文化間のパートナーに対し、自身の行動様式をより理解しやすいものとするをも意味している。さらに、異文化間教育では、相互に受容し、他者を寛容する際に生じるコンフリクトを平和的に解決する能力やコンフリクトを解決するための申し合わせを民主的に受け入れる能力を、できる限り早くからすべての子どもに伝えることが重要となっている。(下

線は原文のまま)

上記の部分は、異文化間教育が単に他者理解にとどまらず、異文化間の視点から捉え直すことを通した自己理解へ至る教育であることを認識していると読みとれる。すなわち、他者の差異がいかにかに生じているのかを子どもたちに気づかせるだけではなく、そこから自身の行動様式を社会文化的に考えさせることで、他者にとって自身の行動がいかなる意味を持つかを捉え直すきっかけをもたらしているということである。また、ここで指摘されている異文化間教育で伝達されるべき能力とは、異文化間能力に含まれる異文化間の問題解決能力である。多文化社会における日常で生じうる異文化間のコンフリクトに遭遇した際に、いかに対処するかという能力をできる限り早くから獲得させることを意図している。

このような市当局による異文化間教育の概念規定から、市当局が多文化社会で生きる子どもに必要な教育として異文化間教育を捉え、その必要性を認識しているということが明白である。

②親との協働

ドイツでは、ドイツ語教育を始めとする移民の子どもに対する教育措置は、外国人労働者を受け入れ始めた比較的早い段階から講じられてきた。しかしながら、基幹学校における移民の子どもの割合や前期中等教育の中退率、移民青少年の失業率がドイツ人に比べ相変わらず高く、期待したほどの教育的措置の成果は上がらなかった。これには、親の教育関心に関係していると考えられ、親のドイツにおける教育に対する理解を深め、積極的に教育の場に参加させようとする取り組みが次第にみられるようになっていく。市当局の構想では、特に母親に焦点を当てた「ママコース(Mütterkurse)^{*)}」について言及している。

教育効果を高めるためには、家庭と教育機関の連携は必須である。(中略)特に両親との協力が話題になるときは、多くの場合、まず第一に家庭の中で子育てを担っている母親の協力が意図されている。そこで、家庭をよりうまく取り込む方法として、いわゆる「ママコース」が異文化間事務所(interkulturelles Büro)の協力の下、実施されている。「ママコース」の基本理念は、学校教育と就学前教育を結びつけることにある。(中略)このコースを受けた女性たちは、家庭の中だけでなく、友達や知人の輪の中で相乗効果を生み出している。これは、第一に、移民女性を孤立から脱出させることに、第二に、親と保育所や学校とのコンタクトをよりよいものにすることに寄与する。このプログラムの目的は、幼児教育において母親や両親の役割を確かなものにすることである。すなわち、定期的なプログラムや母親の集まりはコースの期間を越えて継続するのである。

ここで言及されている「ママコース」は、ビーレフェルト市においても特にトルコ系住民の多い地域で多くみられる移民花嫁が一つの契機として始められたものである。移民花嫁はドイツ社会との接触が少なく、移民コミュニティの中でも孤立していることが少なくない。「ママコース」に参加することによって、単に子育てや教育に関する知識を得るのではなく、移民の

親同士のネットワークを作ることができる。また、このコースの参加者はドイツで初めて子育てを経験する移民も含まれており、さらに、「ママコース」を実施している保育所によっては、対象をドイツ人の母親にも広げている⁴⁾。

このことは、移民の親とドイツ人の親の交流のきっかけを作ることにもなっている。一般的に、ドイツ人との接触の少ない移民の親が初めてドイツ人と集中的に接触する場合は、子どもを預ける保育所である。「ママコース」で互いに顔見知りになっていることで、保育所でも互いに声をかけやすく、子育ての悩みや日常生活上の悩みなど、些細なことも相談することができる環境が生まれる。また、保育所で行われる保護者同士の交流会や保育所の行事への参加も促され、保育所と親の協力がよりスムーズなものとなるであろう。

以上の点を考慮すると、「ママコース」でもたらされる積極的な効果は、構想の中で指摘されている移民コミュニティにおける波及効果や移民の子どもの教育効果を高めるということだけではなく、移民とドイツ人の親の異文化間交流を促進することにもなるだろう。

③言語促進（ドイツ語能力の促進）

近年、ドイツにおいては就学前教育からの早期ドイツ語教育の必要性が叫ばれている。これは、移民の子どものドイツ語能力をできるだけ早い段階から促進することで、学校教育において不利にならないよう考慮していると考えられるものである。このような流れを受け、ビーレフェルト市が位置するノルトライン・ヴェストファーレン州では、2002年に就学前教育における言語促進に関する指針を出している。市当局作成の構想の中で述べられている言語促進に関しても、この指針に準じた形で行われているものがあるが、ここでは私的なイニシアチブによって行われている言語促進について紹介したい。

（私的イニシアチブの一つに）「プロ・ビーレフェルト(Pro Bielefeld)」という協会があり、この協会がズュードリング保育所(Kita Südring)でパイロット・プロジェクトを導入している。このパイロット・プロジェクトは地域の企業によって助成されている。プロ・ビーレフェルトやその前身である「ビーレフェルト財団(Stiftung für Bielefeld)」の発起人は言語促進の教育的構想として以下の点を追求している。

- ・就学前の言語促進は三年間以上に及ぶ
- ・母語は家族の第一言語として第二言語であるドイツ語獲得の基礎となるべきである。ドイツ語の伝達には可能な限りバイリンガルの有償スタッフが関与する。
- ・家族、特に母親は、保育所での活動に積極的に同行し、意識的に家庭環境の中にも取り入れる。母親は積極的に保育所の親の活動に参加する。
- ・言語促進は保育所の総体的な教育責務の中心的な要素である。

上述のプロ・ビーレフェルトの事例は、州や市の財源で行われているものではなく、地域の企業によって支えられているものである。言語促進コースへの参加者は年々増加しており、コースを増設する必要があるが、州や市の財源には限りがある。このため、今後はプロ・ビーレフェルトの事例のように外部資金を得て、行われるコースも増えるであろう。

そのようなコース増設や担当者の多様化は、言語促進に関する意思統一がとりにくくなる。そこで、ビーレフェルト市では言語促進に関する構想を調整するために、青少年支援委員会がワーキンググループを作った。そして、「就学前の言語促進に関するビーレフェルトの指導原則」を提出することとなった。以下はその特徴と言語促進の目的である。

「就学前の言語促進に関するビーレフェルトの指導原則」は、以下の柱で特徴づけられている。

- ・早い段階からの促進
- ・より長期的な促進支援
- ・多言語への鍵としての第一言語の促進
- ・保育所と基礎学校のインターフェイスの調和

（言語促進の）目的というのは、子どもへの知識の伝達と並んで、かれらを承認しているということを示し、かれらのアイデンティティを強め、後の人生の成功のための基礎を示すことにある。この促進は子どものさらなる発達のなかで定期的に目標を設定し、継続されなければならない。また、できる限り早い段階でのドイツ語の獲得は、保育所の教育プログラムへの積極的な参加の前提条件である。就学前の言語促進が一助となり、就学時にはできる限りドイツ語を使いこなし、授業の内容についていくことができ、さらには子どもの能力に見合った修了証書を得られるようにすべきである。

この指導原則では、長期的展望からより早い段階からの移民の子どものドイツ語能力促進を進めようとしていることが示されている。ここで重要なのは、ドイツ語能力の促進が叫ばれつつも、決して移民の子どもの母語をないがしろにすることなく、その確立が子どもの多言語獲得に繋がるとして母語を積極的に捉えていることである。また、このような言語促進の構想が保育所だけで終わるのではなく、基礎学校でも継続して行われるように、保育所と基礎学校の連結の重要性にも言及している。

④保育所

②、③では、主に移民に焦点を当てていたが、異文化間教育の観点から考えるならば、移民の子どもを取り囲むドイツ人の子どもに対する教育的対応も重要なものである。そこで、ここではドイツ人の子どもを中心に、移民とドイツ人の子どもの両者に目を向けた保育所における異文化間活動の構想に目を向けたい。まず、保育所における異文化間教育の出発点と目的として、以下のような記述がなされている。

異文化間教育の出発点と目的

市の保育所では、様々な社会階層や家庭環境、民族的、文化的出自の子どもが生活し、遊んでいる。（中略）様々な家族の文化に基づく多様性は、子どもたちが異質のものから構成されている社会の中での生活に対応するために、共生を豊かにするものと積極的に受け入れられている。子どもは他者に偏見なく近づくが、就学前の子どもはすでに社会環境から他者への評価を得ているということが実証的研究で示されている。

市の保育所における異文化間教育の目的は、共通性に基づいて人々の間の差異を意識的に認識し、それをそのような差異を偏見であると認識し、克服し、互いに注意を払い、互いについて学び、平和に満ちたなかでともに生きることを、男児も女児も学ぶことである。この教育の目的は、異文化間能力の獲得でもあり、移民的背景を持った子どもがいる保育所だけでなく、すべての保育所での異文化間教育が目指されている。

ここでは、子どもたちが保育所にもたらず様々な多様性を積極的に捉えることから始め、子どもたちが持つ異文化に対する偏見をなくし、移民とドイツ人の子どもが多文化社会で生きるため素養を身につけることを異文化間教育の目的として位置づけている。その目的を達成するために異文化間教育へのアプローチとして、ここでは「偏見を意識した教育 (Vorurteilsbewusste Erziehung : アンチ・バイアス教育)」が取られている。

偏見を意識した教育による異文化間教育 (アンチ・バイアス教育)

それぞれ人は偏見を持っており、それは人間相互間の生活においてわれわれを導くものでもある。もし、偏見によって、ある特定の人やグループが差別されれば、偏見は問題になる。その際、特定のグループに対するステレオタイプや表向きの特徴に結びついた評価が問題になる。(中略) アメリカのカリフォルニアでルイズ・ダーマン＝スパークス (Loise Derman-Sparks) が発展させた「アンチバイアス・アプローチ」は、偏見やステレオタイプを認識し、無意識的に (自己の文化に基づいた) 規範を想定していることに対する気づきに焦点を当てている。この教育の目的は、変化を起こすために、(多様性に対する) 配慮がなく、排除のプロセスが生じる所を指摘することである。(後略)

では、アンチバイアス・アプローチを用いた異文化間教育を保育の実践に取り入れるために、保育士はどのような課題や役割を負っているのだろうか。ここでは、移民の子どもの持つ文化的多様性を示すものを保育所の日常のなかに取り入れることが保育士の課題とされている。そして、以下に述べる疑問と保育活動を関連づけ、批判的に検討する必要が述べられている。

- ・ 保育所のどこで子どもたちは自分の第一言語や文化を再発見することができるのか。
- ・ 差別されているグループ、例えば、貧しい家庭や移民の家族、他の宗教を持つ家族、難民や有色人種の家族などを保育所の (活動の) 中でどのように取り扱えばいいのか。
- ・ 様々な文化的背景を持つ子どもが独自に持っている論理やその解釈、独特な関連づけを真剣に受け入れられるのか。
- ・ 子どもたちが (それぞれの生活) 空間を作りだし、時間が経過するのなかで (他の子どもと) 協力する可能性があるのだろうか。

以上のような疑問を保育者が抱きつつ、アンチバイアス・アプローチに基づいた保育環境を整えるために、以下のような点に注意を払う必要があるとされている。

・家族の持つ文化に注意することー親に近づいていくこと

保育士は家族とのコミュニケーションを意識的に図るよう訓練されている。家族との対話の中で、子どもにとって言語発達の促進が如何に重要であるかということや、親が子どもと話すときに母語（第一言語）で話すことが言語発達を促す助けになるということを保育士は知らせる。

保育所は家族同士のコンタクトを促進するような行事（親と子どもが遊ぶ午後、朝食の集まり、家族遠足、家族の祭り、講演の夜、など）を行う。また「ママ・ワーク（Mütter-arbeit）」という母語のできる専門家と保育士によって行われるものがある。そこではかれらの子どもが保育所で面倒をみてもらっている間に、教育に関する疑問について話し合ったり、子どもの発達を促進するような遊びや歌、メディアなどを学ぶ。

・ステレオタイプや決まり切った形式を避けること

保育所の中には、例えば、食器など、子どもたちの文化に基づいた生活環境の中にあるものを備えるようにする。また、絵本は子どもたちの母語で書かれたものを保育所で読めるようにしておく。また、その本やおもちゃなどはステレオタイプやある特定のグループを軽蔑するようなメッセージが含まれていないかをチェックしておく。

・多様性を積極的に話の中に取り入れること

指人形を使って³⁾、それぞれの人形に名前や家族、友達、好み、反感などを特徴づけ、それにより、未知の経験や、あるいはよく知っていて、気持ちのよい経験、逆に不快な経験などが子どもたちに教えられる。子どもたちは人形に自分を当てはめ、解決策を考えたり、他の人形を励ましたり、あるいは自身の経験を告白するようなきっかけが与えられる。

・言語の多様性を聞いて、見て、理解すること

家族の言語の多様性は保育所の空間にもたらされる。可能であれば、子どもは第一言語でそれを母語としているスタッフと会話をする。家族のもつ言語能力は多言語でのお話のプロジェクトや読み聞かせの時間に取り入れられる。子どもの第一言語を母語とするスタッフを配置することにより、家族は自分たちの言語の価値が上がった（すなわち、保育所の中で自分たちが認められた）と感じ、同じ言葉を用いる他の家族とも保育所の中で自分たちの言語でコミュニケーションをとるようになる。これは子どもの自己意識を高めることにもつながる。

・差別されている場合には介入すること：価値を示し、その立場を変えること

（前略）保育所の責任者は、子どもが他の子どもから排除されている場合や、親が自分の子どもを他の国や民族グループの子どもと遊ばせたくないと考える場合、あるいは、大人が子どものいる前で子どもやその家族について否定的な発言をした場合の対処について、チームで対処のストラテジーを申し合わせておく。例を挙げるならば、このような場合に、保育士は子どもに互いに公平な扱いをするという模範を示すというのも、一つの対処法である。

以上のように、保育所における異文化間教育を促進するためのアプローチとして、市当局はアンチバイアス・アプローチを重視している。ここでこれを重視しているのは、子どもが偏見を抱く以前に移民の言語や文化などの多様性を子どもの生活環境にもたらすことで、未然に子どもの偏見を防ぐためである。しかし、すでに子どもが何らかの偏見を抱いている場合は、上述のような指人形の手法を用いた子どもの迫体験を促す手法や子どもや親のなかにある偏見に

基づいた関係性に介入する方法が偏見の除去のためにとられうる。このアプローチは、偏見に気づき、それを克服しようとする点において、異文化間教育論者であるニーケ(Nieke)のいうところの「葛藤の教育(Konflikt- pädagogik)」と通ずる^{*6)}。

3. 異文化間教育的対応の実現可能性を探った実践的措置

上記で紹介した②親との協働、③言語促進(ドイツ語能力の促進)、④保育所の三項目では、ビーレフェルト市の現状を含んだそれぞれの領域で理想とされるモデルが述べられた。しかし、市当局が作成した構想は現状や理想モデルの紹介に留まらず、実際にどのような措置が実現可能かを考慮しており、簡単ではあるが各領域における目的とそれに応じた措置を列挙している。ここでは、先ほど取り上げた②から④に関する記述を紹介したい。

②親との協働

目的：子どもに対する効果的な異文化間教育は親を取り込まなければならない。様々な措置の意味を敏感に受け止め、可能な限り実践的に支援が行われるべきである。

措置：・保育所での「ママコース」を制度化し、継続する。

- ・様々なテーマ、特にドイツ語が子どもの更なる教育機会や職業へのチャンスの鍵を握ることを扱った出身言語による若い親のための情報交換会を開催する。
- ・女性や大人のための居住地に近い託児付きのドイツ語講座を開設する。
- ・移民的背景という事実がもたらす相乗効果を高める。

③言語促進(ドイツ語能力の促進)

目的：就学前の言語促進の領域において、幼稚園段階から基礎学校就学までの内容の段階的な構想は、それぞれの年齢行動に準拠した枠組みの中で調整されるべきである。中期的目標としては、ビーレフェルト市が標準的な言語獲得の把握や調査に用いることのできる統一した方法を作り出すべきである。

措置：・保育所や教育委員会、基礎学校の担当者への専門的な助言を行っていくなかで、就学前の言語促進に関する学習内容や教材についての話し合いを義務化する。

- ・言語能力の把握や評価のための統一のとれた調査手段を導入する。
- ・それぞれの機関で実施している言語促進措置を保育士や教師が互いに聴講する。
- ・「言語促進」をテーマとした親の夕べを開催する。
- ・言語促進措置の実施前や実施中に教師に対する継続教育を提供する。

④保育所

目的：家族の文化に基づく多様性は、異質なもので構成されている社会の中での生活に対応するために、共生を豊かなものにするとして積極的に受け入れられる。

措置：・移民的背景をもったスタッフや子どもの第一言語の知識を持ったスタッフを増やす。

- ・家族との協働に集中的に取り組むための人的資源や資金源を活用する。

- ・例えば、テーマに応じた講話者がいるような親の夕べを開くなど、保育所における「親の教育」の機会を提供する。
- ・第一言語としてドイツ語を獲得していない子どもに対し、三年間にわたり保育所に通えるようにする。
- ・子どもの第一言語による非暴力で反人種主義教育の教材を購入するための予算を計上する。
- ・異文化間のテーマに関する継続教育を提供する。
- ・両親を取り込んだ第一言語の促進プロジェクトを拡大する（例、リュックサック・プロジェクト⁷⁾）。
- ・外国籍の子どもではなく、移民的背景を持つ子どもの割合に関する定期的な統計調査を実施する。

以上の②から④に挙げられている実際的な措置に共通して見られるのは、実際に移民家庭や保育所での支援や活動に携わっている人々によって行われている主導的かつ柔軟な取り組みを施策の中に位置づけ、行政もさらに関与していこうとしている点である。これまで支援者主導で行われてきた取り組みを行政が制度化するということは、その取り組みの意義や重要性が行政側に認識されたということを示している。特に、「ママコース」の継続や子どもの言語促進や異文化間教育に関する保育士の継続教育、保育所における異文化間教育のための教材整備などはかなりの費用を要することから、行政の中でこれらの取り組みが重視され、そのための措置が講じられるのは、資金面から見ても非常に有効である。制度化はさすれば、取り組みの硬直化を招くことにもなりかねない。そのため、常に現場に関わる人々と行政の間で現場のニーズを確認し、実現可能な措置を更新していく必要があるだろう。そうすることで、この市当局による「就学前段階における言語促進と異文化間教育への構想」をさらに深化することが可能となるだろう。

4. おわりに

以上、2003年にビーレフェルト市が作成した「就学前段階における言語促進と異文化間教育への構想」の内容を、①異文化間教育の概念規定、②親との協働、③言語促進（ドイツ語能力の促進）、④保育所の四項目に焦点化し、簡単に紹介し、若干の考察を試みた。

筆者は本稿において、異文化間教育やその教育的視点が重要となる実践領域として、親との協働、移民の子どもの言語能力の促進、保育所の三点を取り上げた。これらは単に筆者の関心によってのみ取り上げたのではなく、近年のドイツにおける移民家庭を取り巻く教育動向を踏まえたものである。既に述べたことではあるが、移民の子どもの教育効果を高めるために親を教育の場に取り込むことや早期からのドイツ語教育は、今日、ドイツにおいて盛んに議論されている点である。これらの議論に応じて、諸州や諸都市では、特に移民の子どもの早期ドイツ語教育に焦点化した指針を作成している。しかし、ビーレフェルト市は移民の子どもに対する早期ドイツ語教育のみに焦点化せず、合わせて、移民の子どもの親への対応の必要性やかれらを取り巻くドイツ人の子どもに対する早期からの教育的対応についても言及している。このこ

とから、多文化社会において移民の子どもに関係する人々を包括し、その子どもを取り巻く環境全体を含んで、幼児期からの教育に取り組もうとする姿勢が伺える。

また、この構想は他の諸都市と比較した際、決して最先端をいくものとはいえないが、次の点では異文化間教育の重要性を明確に捉えた公的文書として位置づけることができるだろう。それは、異文化間教育の「間」ということばが指し示す相互作用を重視した上で、相互作用を通して他者を理解し、それにより自己を振り返る教育的試みとして異文化間教育を位置づけている点である。このように異文化間教育の重要性が行政レベルで認識されるならば、それを反映させた教育措置が講じられるのではないだろうかと思われる。今後、この文書を契機に、就学前教育に携わる人々がいかに異文化間教育の構想を取り入れて教育を行っていくのか、現場の実践にも注目したい。

<註>

*1) Amt für Planung und Finanzen, Jugend, Soziales, Wohnen, 2003 : Konzept zur interkulturellen Erziehung im Elementarbereich einschließlich Sprachförderung. Bielefeld この構想を逐語的に日本語訳するならば、「言語促進を含む就学前教育における異文化間教育への構想」となるが、「含む」という日本語訳を用いることで、言語促進があたかも副次的なもののように扱われているというような誤解を招く恐れがあった。筆者は移民の子どもに対する言語教育を考える際に、異文化間教育的観点なくして行うことはできないという立場を取ることから、異文化間教育と言語促進を同列のものとして位置づけるため、あえて並列を意味する訳を行った。

*2) 日本における最近の先行研究としては以下のものが挙げられる。外国人幼児の適応に関するものとして、柴山真琴(1998)「ある中国人5歳児の保育園スクリプト獲得過程—事例研究から見えてきたもの」、箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィ入門』、ミネルヴァ書店。子どもを受け入れる保育士に関するものとして、塘利枝子(2005)「異文化間教育の担い手としての保育者の行動変容—他者と『つながる』きっかけとは何か」、佐藤郡衛・吉谷武志編著、『ひとを分けるもの つなぐもの—異文化間教育からの挑戦』、ナカニシヤ出版。理論や方法論に関するものとして、廿日出里美(1998)「幼児教育における異文化間教育の理論と方法論の展望」、『異文化間教育』第12号、異文化間教育学会。また、上記の研究者と共に行われた幼児期の異文化間教育に関する共同研究として、山田千明(2004)『多文化に生きる子どもたち—乳幼児期からの異文化間教育』、平成13年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究B(1))研究成果報告書が挙げられる。

*3) 「ママコース」は週二時間、三カ月間にわたり実施され、そこではドイツの幼児教育や学校教育のシステムや子どもの発達、子どもの言語獲得、両親の権利や義務についての情報提供が行われる。このコースはドイツ語と参加する母親たちの母語の二言語で行われる。

*4) 筆者は留学中に、保育士を中心とした教育関係者による就学前の移民の子どもに対する言語促進プロジェクトの会議に出席し、そこに参加していた保育士から次のような話を聞いた。

「移民のケアばかりしていた頃はドイツ人の親とうまくいかなかったが、子育てや教育に関する疑問はドイツ人の親も同様に抱えているので、ドイツ人の親にも移民の親と同じようにした。

そうすることで、保育所で行う親の夕べなどの行事に多くの親が参加するようになった。」

*5) 異なる家庭環境や文化的背景など、それぞれの特徴を一つ一つの人形につけていき、クラスの中の多様な子どもを反映させた人形となる。この人形を用いた話が進むにつれて、子どもたちが人形と自分とを重ね合わせ、差別のような不快な経験も含めた様々な経験を感じる。これは「ペルソナ人形」を用いた手法であり、詳細はダーマン＝スパークス著、玉置・大倉訳(1994)を参照のこと。

*6) ニーケは、調和的な雰囲気の下で行われる異文化体験や異文化理解を目指す「出会いの教育」と多文化社会の発展の妨げを解消するような葛藤に方向付けられる「葛藤の教育」の二つに異文化間教育の方向性を大別している。詳細は、天野編著(1997)、Nieke(2000)を参照のこと。

*7) リュックサック・プロジェクトとは、移民支援機関(Regionale Arbeitsstellen zur Förderung von Kindern und Jugendlichen aus Zuwandererfamilien : RAA)が作成した就学前教育における子どもの母語能力、ドイツ語能力、認知発達の促進を目的としたプログラムである。このプログラムでは、母親が子どもの発達に影響を及ぼすことから、母親が重要な役割を担っている。なお、詳細については別に論じる予定である。

<参考文献>

天野正治編著、1997、『ドイツの異文化間教育』、玉川大学出版部

山田千明、1997、「幼児期における多様性尊重の教育—アメリカにおける Anti-Bias 教育をてがかりとして—」、筑波大学比較・国際教育学研究室編『比較・国際教育』第5号

ルイーズ・ダーマン＝スパークス著、玉置哲淳・大倉三代子編訳、1994、『ななめから見ない保育』、解放出版社

Amt für Planung und Finanzen, Jugend, Soziales, Wohnen, 2003 : Konzept zur interkulturellen Erziehung im Elementarbereich einschließlich Sprachförderung. Bielefeld

Nieke, W., 2000 : Interkulturelle Erziehung und Bildung Wertorientierung im Alltag. Leske +Budrich (2. Auflage)

The Concept of Intercultural Education in Preschool Education :

The Case of Bielefeld's Public Concept in Germany

Akiko ITO

In this paper, I will try to make clear how intercultural education is promoted in preschool education as in the case of Bielefeld's public concept in Germany. This concept refers to two important points, one is the early German language education for immigrant children and the other is intercultural education for German children who are surrounded by immigrant children. Through this public concept, we can understand how the local authority, which faces multiculturalisation in the local area, accepts this multicultural situation and how it will try to contribute educational opportunities to children.

In Germany, the acceptance of foreign laborworkers and their families led to some educational responses, that is intercultural education. In the beginning of the acceptance, the German government paid attention to elementary and secondary education in which a lot of foreign students attended and it seemed that intercultural education was very important in these schools. Gradually, more and more children with immigrants background were born in Germany and they went to nuresery school or kindergarten. From this realities, it is more important for immigrants children to receive some educational supports and for German children to be taught the way to live together through intercultural education.

Therefore, I will focus on some points in this public concept which are important in the field of intercultural education. Firstly, I introduce four points : the definition of intercultural educaion, work together with parents, encouragement of German language competency and the nuresery school. Also, I will make some brief comments. Secondly, I will introduce some practical actions in this concept with the relation to these four points. This concept refers not only to some ideals in some educational fields but also practical actions.

In conclusion, I will summarize that this concept reflects the tendency in German education today. I will put a high value of this concept because Bielefeld's local authority refers to the education response to both immigrant children and German children in the base of intercultural education. It can be clear that the local authority recognizes the importance of the meaning of "inter" which means "interaction" in intercultural education. In this sense, this public concept is a very important one.